

## △▼海員組合本部会館・改修工事▼△

— 東京都六本木 —

### 未来の後進へ、活動拠点を 引き継ぐため

◇天祖神社で安全祈願 所在地「六本木7-7-7」からスリーセブンの縁起の良い神社といわれている

改修工事が始まった海員組合本部会館の安全祈願祭が、小雨模様の1月23日、本部会館近くに位置する天祖神社で行われ、松浦満晴組合長をはじめ、田中伸一組合長代行、鈴木順三組合長代行、齋藤洋総務局長と関係者が参列、宮司のお祓いを受けた後、厳かに玉串奉奠が行われ、組合本部会館の改修工事の安全作業・無事故を祈った。祈願祭終了後に、本部会館の各フロアで、工事業者から工事内容の説明を受けた。

-天祖神社- 今から約600年前、至徳元年（西暦1384年）に祀られ、品川沖から毎夜竜が、御灯明を献じたという言い伝えから、竜灯山と呼ばれ、神社名も龍土神明宮と称えられた。現在の御社殿は昭和32年に再建され、木肌の美しさは日本の伝統的建築物の象徴といえる。

◇文化財として評価を受けた海員組合本部会館 ドコモモ・ジャパンプレートを贈呈される

DOCOMOMO= モダン・ムーブメントに関わる建物と環境形成の記録調査および保存のための国際組織  
海員組合本部会館= モダン・ムーブメントの建築の日本における代表的作品として選定される

昨年12月18日、建築業界関係者による海員組合本部会館見学会が開催され、同時にドコモモ・ジャパンプレートが贈呈された。2016年に国立近代建築資料館で「社会と建築を結ぶ-大高正人の仕事」展が開催されるにあたり、現存する大高建築として海員組合本部会館が取り上げられ、その造形と共に状態の良さが、建築関係者に感銘を与え、シンポジウムや見学会が開催されるなど、改めて注目を集めることとなった。こうした動きに後押しされ、調査と検証が行われると、増築部分の撤去を行うことで耐震性能が確保できるという結果が示された。これに基づき、今後の長期的な使用に耐える改修計画が提案され、保存改修に至ることとなった。

開発の荒波に呑み込まれる六本木の地にあって、海員組合がその拠点である本部会館の保存改修を決定したことは、極めて稀有なことであるが、建築的・歴史的価値を踏まえた改修設計・工事により、新しく生まれ変わる海員組合本部会館は、産業別労働組合の未来の後進たちに引き継ぐ、海上労働運動の新たな拠点として活躍することが期待されている。

「海員だより」

#### ◆◆海員組合本部会館の歴史◆◆

大高氏が手がけた「海員組合本部会館」は、大高氏が設計チーフを務めた東京文化会館と共通するデザイン要素も多くみられ、また、1960年の世界デザイン会議で榎文彦と共に提案した「群箱形」の理念に基づき、都市環境の一部でありながら、彫りの深い個性的な表情を持つ建築だ。これまで丁寧に維持管理されてきたが、老朽化や耐震問題などにより、建て替え検討がされてきた経緯がある。しかし、建て替えると延床面積が大幅に減ることなどから、結論が出ない状況が続いたが、文化財評価を受けたことなどから、保存改修するに至る。

全日本海員組合は、船員と海事関連産業で働く人々に組織する日本で唯一の産業別労働組合。全日本海員組合の結成は1945年10月に戦後初の労働組合として発足したが、その前身は1921年に結成した日本海員組合に遡り、100年を超える海上労働運動の歴史がある。戦前の海員組合の本部会館は神戸に置かれていたが、戦後は活動の中心が東京に移ったため、移転の可否が議論され、神戸は海上労働運動発祥の地であり対立意見も多い中、3度にわたる全国大会での議論の末、東京への移転が決定された。その後、現在の敷地の購入が決まり、1961年に大高正人氏に設計が依頼され、1964年に「組合員の団結の象徴」として現在の本部会館が完成し、以来60年近い間、組合の拠点として、その活動を支えてきた。

※大高正人氏：工業化部材の開発から都市スケールの計画やまちづくりに至る幅広い仕事に取り組み、戦後の建築界を牽引した